

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：34429

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320155

研究課題名（和文）新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成

研究課題名（英文）The Reconstitution of the Mongol History basing on the Newly Discovered Sources of the Khitan and Mongol Scripts

研究代表者

松田 孝一（Matsuda, Koichi）

大阪国際大学・公私立大学の部局等・名誉教授

研究者番号：70142304

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,300,000 円、（間接経費） 3,690,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究でモンゴル国で新発見の契丹大字で記されたブレーニィ・オボー碑文、モンゴル帝国・元朝時代の現地碑文等、ハルボハ遺跡で発見した白樺樹皮文書113件により、モンゴル史の再構成を行った。ブレーニィ・オボー碑文の1行目に「清寧四年[1058年]八（九）月一日」という年月日の記載の存在とその音価案を示した。白樺樹皮文書の保存処理を日本で行い、写真128件の解説から17～18世紀の良馬の解説、民衆が願望実現のために書写した陀羅尼、悪夢払い書の存在を確認した。西遼とモンゴル帝国の歴史的連続性を解明、13～14世紀の元朝政府の宗教政策と白樺樹皮文書に見える宗教生活の断層と共通性を考察した。

研究成果の概要（英文）：We reconstituted the history of Mongolia, using Bureenii Oboo inscription written by the Khitan Capital Letter discovered in 2010, the existing inscriptions written during the Mongol Empire and the Yuan dynasty, and 113 pieces of Mongolian birch bark documents discovered in the ruin of Kharbuh discovered in 2010 and 2011. In the first line of the Bureenii Oboo inscription, the date, "the 1st day of the 8th (9th) month of the 4th Year of Qingning(1058)", is decoded with its pronunciation. As for the birch-bark documents, The religious belief of the common people such as how to pray buddha to realize a desire were recognized. We could find the continuation of the Western Liao and the Mongol Empire and the difference of the religious cultures and commonality of praying secular benefits between authorities of the Mongol Empire and the Yuan dynasty in 13th and 14th centuries and common people of 17th and 18th centuries in the birch-bark documents.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中央ユーラシア史 モンゴル史 契丹文字 白樺文書 文化財保存・修復

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、内陸アジア史の研究は、文献のみに依拠する従来型の研究から、現地へ赴き、遺蹟・碑文・出土文書等を直接調査して従来の研究を検証・深化させる方向へと大きくシフトした。13～14世紀のモンゴル帝国史の分野においても、モンゴル国や中国の研究者と連携し、新たに発現した資料を調査・研究することが主流となり、結果として数多くの歴史学的新知見を得るに至っている。松田は、1994年以来モンゴル国におけるモンゴル国との碑文等の調査（通称「ピチエース・プロジェクト」）に従事し、モンゴル高原の遊牧民族史研究に資する碑文等の新資料を得た。2009年以後「ピチエースⅢ」を松田孝一を日本側代表者、モンゴル側は、国際遊牧文明研究所所長エンケトブシンを代表者として学術交流協定を締結して推進している。

2010年に新たに2件の資料が発現した。1件は、モンゴル国ドルノゴビ県エルデネ郡のブレーニィ・オボーで発現したモンゴル時代（13～14世紀のチンギス=カンの大モンゴル国から1368年の元朝北奔までを「モンゴル時代」と称す）を遡る11世紀の1058年契丹大字碑文1件であり、さらに一件は、ボルガン県ダシンチレン郡ハルボハ遺蹟で発掘したポストモンゴル期の16～17世紀の白樺樹皮文書群86件である。白樺樹皮文書は2011年の調査で27件が発見され、計113件が研究対象となった。

遼（契丹）（国家としては「遼」、民族としては「契丹」の表記を原則とする）はモンゴルが歴史の表舞台に登場する直前の10～12世紀に中国東北部からモンゴル高原にかけて勢力を有した集団で、モンゴル帝国成立時に大きな影響を与えたとされる。しかし遼（契丹）に関する文献資料は豊富ではなく、その母語である契丹語を記した契丹大字・契丹小字がほとんど未解読のため、遼（契丹）がモンゴルといかなる関係を有したのかは解明されていない。一方、14世紀後半に元朝が求心力を失ってから、17世紀末にモンゴルが清朝に支配されるに至るまでのポストモンゴル期のモンゴル史についても、資料的制約のため、その歴史像は曖昧模糊の面がある。

こうした状況下で、それぞれの時代に繋がる新資料が出土した意義は大きい。新たに出土した契丹文字資料・モンゴル文字資料等に基づいてモンゴル史を再構成する研究を日本の研究者の主導によって行うことが喫緊の課題であるとの認識が研究の背景にある。

2. 研究の目的

これらの資料について、その発現・出土状況の確認、保存・修復、内容の解読と歴史的調査を行い、モンゴル史において史的制約から十分に明らかにされてこなかった二つの時期、1) チンギスハン登場以前の11～12

世紀、2) 14世紀後半～17世紀半ばまでのポストモンゴル期それぞれについてその歴史像を再構成することを目的とした。

また、13～14世紀のモンゴル史と1)、2)の時代との連続性について、遼～西遼がモンゴル時代にどのような関係を有し、影響を与えたのか、またモンゴル時代とポストモンゴル期との歴史的な連関性についても考察する。

3. 研究の方法

契丹文字資料の解読研究については、松川節が、平成23年度に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「契丹語・契丹文字研究の新展開」の研究代表者をつとめており、その研究会での活動と連携して進めた。ブレーニィ・オボー碑文は、発見場所からモンゴル国立博物館に移動され、収蔵・展示されている。松川は同博物館との折衝を進め、平成23年度において同博物館において松川は武内康則の研究協力を受けて同碑文の文字の同定作業を進め、平成25年度に、レーザー光線を使った三次元デジタル化により文字の確定のための計測を、専門家の山口欧志（国際日本文化研究センター、後、帝塚山大学）の協力を得て実施した。

白樺文書の解読研究については、井上治が、研究実績（「モンゴルの白樺樹皮文書と白樺樹皮文化に関する調査研究」平成18年度～平成20年（平成21）年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、平成22年3月、総509頁）を有し、井上を中心として松川、オチルが研究を進めた。

文書は数百年間地下に埋もれ風化しているために研究対象とする前に、元興寺文化財研究所保存科学センターにより保存・修復を行った。白樺樹皮文書はオチルにより平成23年11月にもたらされ、保存処理を終えて平成24年10月にモンゴルへ持ち帰られた。

上記の遼（契丹）時代と白樺樹皮文書の時代、すなわちポストモンゴル期を結ぶ13、14世紀との連続性については松田、村岡が研究を進めた。

4. 研究成果

初年度までの研究活動、成果は『「新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成」2011年度活動報告書』（松田孝一・村岡倫・松川節（編）、大阪国際大学ビジネス学部松田研究室、2012年4月、31p.）を刊行、広報した。内容は以下の通りである。

- I. 学術交流協定の締結と2010・2011年度の調査概要 松田孝一・1
- II. 2010年度ハルボハ城址遺蹟における白樺文書の発掘調査 松川節・松田孝一・2
- III. 2010年夏季碑文調査 松田孝一・村岡 倫・松川節・4
- IV. 2011年6月ハルボハ城址白樺文書発掘地調査行動記録 松田孝一・11

- V. 2011 年度 8 月調査行動記録
松川節・村岡倫・松田孝一・13
- VI. オチル教授招請研究集会・講演等記録
松田孝一・村岡倫・松川節・18
- VII. 井上治研究分担者（島根県立大学教授）
平成 23 年度活動報告 井上治・21
本科研究関連等の新聞報道記事 29
- この報告書により、本科研究で研究対象となった 2010 年度のブレーニイ・オボーでの契丹文字碑文、ハルボハ遺跡での発見・及びその後の研究・元興寺文化財研究所保存科学センターでの保存事業の経緯、オチル教授を招聘した研究集会、井上治によるこれまでの白樺樹皮文書について、保存修復、研究方法、成果の総括、新たな解読研究の一端が示された。
- 平成 22～23 年度に『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究』（松田孝一・オチル編、大阪国際大学ビジネス学部、松田孝一研究室、2013 年 3 月、288p.）を刊行した。
- 本書は、村岡、松川その他、宇野伸浩（広島修道大）、中村淳（駒澤大）、松井太（弘前大）、矢島洋一（奈良女子大）、磯貝健一（追手門大）、牛根靖裕（立命館大）、谷口綾（龍谷大学大学院生）らと 1994 年以来継続してきたモンゴル国でのモンゴル帝国・元朝時代の碑文・墨書の銘文の拓本写真、内容の研究成果を集大成したものである。これにより 13～14 世紀のモンゴル高原史の現地資料が一望のもとに見ることができ、また碑文の内容に英語訳が付しており、世界の歴史学界への重要な資料基盤を提供するものである。本書の碑文等は以下の通りである。1. 釈迦院碑記（1257）、2. 宣威軍碑（1279）、3. 和寧郡忠愍公廟碑（1327）、4. 和林兵馬劉公去思碑（1331）、5. カラコルム三皇廟殘碑（1331、1334）、6. モンケ・カアンの後裔たちとカラコルム、7. 和寧路文廟記（1338）8. 朔建三靈侯廟記（1339）、9. ゴルバン=ゾー癸未年殘碑（1343）、10. 大司農保釐朔方記（1346）、11. 勅賜興元閣碑（1347）、12. 嶺北省右丞郎中総管收粮記（1348）、13. 前参議太禧宗禋院事と驪碑二断片、14. ゴルバン=ゾー殘碑 6 断片、15. ヒジュラ暦 732 年カラコルムのペルシア語碑文（1332）、16. ヒジュラ暦 742 年カラコルムのペルシア語碑文（1341）、17. ヒジュラ暦 748 年イマーム・ユヌス墓碑文（1348）、18. フイテン=ゴル岩壁銘文、19. アラシャン・ハダの岩壁銘文
- これらには、モンゴル高原における、オイラト王家の動向、クビライの軍事戦略、モンケカン一族の動向、14 世紀のカラコルムにおける元朝行政の具体的様相など、13・14 世紀の政治・行政関連の情報、孔子廟、三皇廟（医学）、三靈侯廟（豊穰等祈願信仰）、イスラーム神秘主義教団クブラヴィーアの大都とカラコルムを結ぶ活動などモンゴル帝国・元朝で展開した宗教政策・信仰生活の諸相が記されている。それらは、モンゴル時代に先行する契丹文字碑文、モンゴル時代に続くポスト

モンゴル期の白樺樹皮文書資料をつなぐモンゴル時代のモンゴル現地の資料で、モンゴル史の歴史像の再構成に必須の資料的基盤となる。

次にブレーニイ・オボー碑文の研究成果について松川は上述の共同研究プロジェクト「契丹語・契丹文字研究の新展開」の成果を http://repository.tufts.ac.jp/bitstream/10108/74382/1/field-8_p04-05.pdf ・ <http://qutug.la.coocan.jp/2013/130418MatsumakawaLow.pdf> [モンゴル語版] や新聞等で広報した。また、武内康則も同様の広報（http://repository.tufts.ac.jp/bitstream/10108/74401/1/field-8_p06-07.pdf）を行い、本科研究への成果報告書「ブレーニイ・オボー碑文解読に向けた予備的考察」（武内康則、日本学術振興会/大谷大学）2014、A4 判、5p.）を松川を通じて提出した。松川の広報や武内報告の概要は以下の通りである。

契丹文字は大字と小字の 2 種存在し、大字は主として表意文字、小字は主として表音文字と言われる。両文字ともに未だ解読されていないが、小字の方が若干語彙の理解が大字よりも進んでいる。ブレーニイ・オボー碑文は大字によるものである。大字は現在異体字を含めて 1600～1700 程度の文字が知られており、読み方が推定されているものは 188 字に過ぎない（松川節：朝日新聞 2011 年 10 月 28 日記事でのコメント）。ブレーニイ・オボー碑文は、大きさは縦 179cm、横 54cm、厚さ約 30cm である。7 行にわたって契丹大字が刻されている。1 字の大きさは 3～4cm で、1 行当たり 30～40 字が刻されている。しかし、自然石に刻されているため判読は困難である。碑文の中央左部分が欠けているほか、碑文下部には完全に磨滅したと考えられる部分がある。およそ 250 字が確認できる（武内報告 p. 3）。

武内康則の報告によれば、「碑文の解読は極めて困難であり、現段階では最右行の冒頭部分に日付が記されていることが分かるほか、他の契丹大字資料に見られる字形をいくつか同定できる初歩的な解読の段階にある。冒頭部分に記された日付部分の解読及び文字の音価推定が行われ、最右行の 9 文字は、

「**𐰽 𐰺 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇 𐰇** (受) 月 一 日」

「清寧四年八（あるいは九）月一日」を意味し、その発音は「[ʔ] as-ar dur aj ɲem (i) sajr [ʔ] ɲer」と推定された。今後は他の契丹大字資料との比較により文字の同定・解読を進めていくことが肝要となるであろう。」と結ばれている。

白樺樹皮文書内容については、井上治・松川節、研究協力者の A. オチルにより検討され、検討会が持たれ、井上から以下のように報告書（井上 治（島根県立大学総合政策学部・教授）『新出土契丹文字資料・モンゴル文字資料に基づくモンゴル史の再構成 成果報告

書』、2014、A4判、57p.)が提出された。また、井上によってあわせて提出されたそれらの概要は以下の通り。

1. 「馬の容貌 (相馬経)」

良馬の様を解説したテキストとしてモンゴルでは広く知られている。同じようなテキストはチベット語の民間的なテキストにもあるとされている。牧畜を共通の基底生業文化とし、シャマニズム的自然崇拝を基底としその上に仏教が立脚する精神文化体系を共有するモンゴルとチベットでは、多くの民間的テキストが翻訳され共有されている。このような現象が白樺樹皮文献においても確認できたことになる。仏教や仏教の影響を濃厚に受けている民間信仰に関連したテキストが大部分を占める白樺樹皮文献に、この morin-u singsi (sinji) の存在が確認されたことは、白樺樹皮文献のテキストに濃厚な民間性を見出すべきであるという井上の主張を補強する。

2. 「聖、六つの門と言われる陀羅尼」

陀羅尼は、元来は仏教修行者が覚えるべき教えや作法という意味であるが、これが転じて、暗記されるべき呪文という意味の理解が現れた。内容は、神や仏、菩薩や仏頂尊などへの呼びかけや賞賛・賛嘆、祈願・誓願であることが多い。これを唱える、書写する、暗記すると様々な霊験・利益が現れるとも信じられるようになった。こうした意味で、陀羅尼とは、まさしく一般民衆の願いを叶えるための呪文であり、民間に広まった仏教的テキストの代表であると言える。

3. 「悪夢を追ひ払う書 (悪夢の経)」

「悪夢を追ひ払う書 (悪夢の経)」はオロンスム、ハルボハ出土のモンゴル語資料に発見されているばかりでなく、世界各地のモンゴル語古文獻所蔵機関にも多く所蔵されている。広く人口に膾炙した民間的テキストである。通常、夢占いとは夢の中に登場した印象的なものをシンボルとして夢の中身を解釈するものである。この、悪夢払いのテキストはまさに夢に登場する象徴的なシンボルを挙げ、それを一定の凶事と結びつけ、その凶事の内容を転嫁する相手を指し示し、その転嫁が叶うよう祈るという構成になっている。16世紀から17、18世紀にかかるモンゴルの出土文書には、キャリアが白樺樹皮であれ紙であれ、人々の日常行動を制御する占いという民間的なテキストが出土しているのであり、本科研で扱った白樺樹皮からもそれが発見された。

井上はまた、別途本科研と関連して、平成24年度に、「北東アジアの白樺樹皮文化—環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学—」(『北東アジア研究』22、2012、pp. 81-106)を著わし、モンゴルを含む北東アジアの白樺樹皮文化についての考察を行った。その中で、モンゴルの白樺文書には、おおむね、人口に膾炙した仏典、民間信仰関連のテキスト、占いが記されていると総括し、17世紀から18

世紀にかけて書かれたものと考えている。内容的にはオロンスム遺蹟の仏塔跡から出土した17世紀の紙文書とも共通していると指摘している。民間信仰のテキストは、モンゴル人の仏教信仰と自然崇拝、生業のありかた、そして、それらの間の相互関係を反映していると思われるとしている。

本科研の対象とした新発見の白樺樹皮文書の検討は完了したものではなく、今後も解読を進め、16世紀のチベット仏教受容以後のモンゴル人の民間信仰を含めた精神的価値観を含めた歴史像の解明に向かいたい。文書は研究の完了したものから順次公刊して行く所存である。

次に遼(契丹)時代と白樺樹皮文書の時期、すなわちポストモンゴル期の間を結ぶモンゴル帝国期との連続性に関する研究については、松田孝一、村岡倫により検討が進められた。チンギス=カンの政権樹立過程の検討し、同時期における西遼のモンゴル高原への影響力について再構成した。

西遼は遼の王族耶律大石が金に征圧されつつあった遼政権から離脱してモンゴル高原へ逃れ、1124年鎮州カトン城でモンゴル高原諸勢力を糾合し、アルタイ山脈を西へ越えて中央アジアに進出した政権で、その一族はそこで5代88年間政権を維持した。その間、モンゴル高原へ西遼が影響力を保持したかどうか、チンギス=カンの勃興と西遼はどのような関係があったかは、顧慮されたことがないテーマであった。

同時期の金朝のモンゴル高原対策は、西遼のモンゴル高原への影響力を排除することにより、高原の東方のタタル部などを金朝側に引き込んで西遼に対抗させていたことが確認された。『元朝秘史』に記述されている高原諸部族の抗争は、金朝と西遼間の代理戦争とも理解され、後のチンギス=カンすなわちテムジンは金朝派となり、西遼から金朝へ寝返ったケレイトのトオリルことオンカンと提携して両者は金朝のバックアップを受けながら西遼派の高原諸勢力との抗争を進めたことを明らかにした。この成果は白石典之編『チンギスカンとその時代(仮題)』勉誠社に掲載される予定である。

チンギス=カンの国家が農耕地帯をも含めた広大な領土を統治するため採用した制度には西遼の制度と共通性が見出される。その背景には西遼の影響力のモンゴル高原での存続といった背景があってこそ理解される。

ブレーニィ・オボー碑文を初めとして契丹文字の解読研究は緒についたばかりで遼、西遼のモンゴル高原支配についての歴史像の再構成は契丹文字碑文の研究の進展に期待したいが、遼～西遼のモンゴル高原支配の連続性の理解は遼史・西遼史研究、モンゴル帝国研究に新しい視座を提供するはずである。

次にモンゴル時代と白樺樹皮文書の時代との連続性についてであるが、『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究』に収録さ

れた碑文等には、モンゴル高原の政治権力・行政のあり方、及びカラコルムの宗教施設の建設事業において、国家安泰を希求する公的な宗教政策と中国本土とモンゴル高原の物流を基礎とした 14 世紀カラコルムの繁栄とイスラームを含めた国際性が窺われる。

モンゴルは 16 世紀にアルタンハーンがチベット仏教を再受容し、アバダイハーンがカラコルム跡地一角にエルデニゾーを建設した。以後、チベット仏教は国家安泰のみならず、モンゴル時代とは異なり一般民衆レベルへも浸透したと理解される。17～18 世紀のものと考えられる白樺樹皮文書に示されているのは、ポストモンゴル期のチベット仏教の民衆レベルでの宗教生活への浸透である。

井上は、モンゴル時代とポストモンゴル期のモンゴル社会での仏教のあり方について推測としつつも、次のように見通している。「ハラホトやトゥルファンなど出てきたモンゴル語資料のうち、ポストモンゴル期の出土文書ではきわめてまれな公・私文書類を除いた残りは、大づかみに言って、宗教的内容のものと古い暦のたぐいであるといえる。モンゴル時代のハラホトとトゥルファンで出土した著名な経典や讃はポストモンゴル期の出土文書にも見つかったものがある。これらは大蔵経に収められている正典扱いのものがほとんどである。これは一定の仏教的知識や理解が求められる内容で、民衆の実生活の場面とは距離があるように思われる。吉日占いのたぐいも同じようにモンゴル時代にもポストモンゴル期にも見つかった。こちらのほうはかなり密接に民衆の実生活に関係するものだと思う。これまで出土文書を見てきて、モンゴル時代に出土例を見ていないのは、「サン (bsang)」という焚香儀礼文である。仏、高僧、諸天、聖なる山川、ゲセル・ハーンなどに香を焚いて招福攘災を祈願する民間信仰の最たる場でラマが読み上げる、文字数の少ない祭文で、大蔵経に採られる正典ではない。これが 16 世紀以降の仏教再伝以降はよく見つかったのに対し、モンゴル時代は見つからない。大変大きな違いだろうと思う。仏教信仰がより民衆の側に近づいたからこそこの現象であると解釈している。民衆の生活により近い次元の内容という点でいえば、今回出土した白樺文書の中に、相馬経があったことがその最たる好例ではないかと思う。相馬経は信仰とは関係のないものなので、まさに民間的なテキストであるといえると思う。権威ある正典類・吉日占いが受容されていた状況は時代を通じて変わらないが、具体的な信仰・崇拝儀礼に対応したテキストがポストモンゴル期に目立つことから、こうしたテキストを読むことのできるラマを通じて招福攘災を祈るようになっていたのがポストモンゴル期の仏教再伝来期の民衆の信仰生活のあり方であったと思われる。翻ってモンゴル時代には、モンゴル人の中に於ける仏教の役割が深度

を増していなかった、いいかえると土着の信仰体系（シャマニズム、アニミズム）が招福攘災を十分に担っていた状況だったのだろうと推測する。以上のようなことを考えているが、モンゴル時代のモンゴル民衆のことがとにかくわからない。本当にあくまで推測の域を出ない。」と。

本研究課題の研究により、遼（契丹）のモンゴル高原への勢力拡大、西遼の建国とその後のモンゴル高原への影響力の持続、その影響を受けたチンギス=カンのモンゴル帝国への連続性が確認され、元朝時代のモンゴル高原の繁栄の消滅の後、ポストモンゴル期、仏教要素のモンゴルの民間信仰への深い関わりの実態が理解された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

- ① INOUE OSAMU, Excavated Mongolian Materials of the Seventeenth Century, *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 査読無、56 巻、2012、66-79
- ② 松川 節、プレーニィ・オボー契丹大字碑文（モンゴル国）の発現、遼金西夏史研究会 Newsletter、査読無、4、2012、40-43
- ③ Hitoshi Muraoka, Exploration of Erdene Zuu Conducted by the Otani Expedition Team, Takashi Matsukawa, Ayudai Ochir (ed.) *The International Conference on "Erdene-Zuu: Past, Present and Future"*, 2011, pp.119-127
- ④ Osamu Inoue, Old maps showing Erdene Zuu Monastery, kept in W.Kotwicz's collection in the Cracow Branch of the Archives of the Science, Polish Academy of Sciences and Polish Academy of Arts and Sciences, Takashi Matsukawa, Ayudai Ochir (ed.) *The International Conference on "Erdene-Zuu: Past, Present and Future"*, 2011, 59-72
- ⑤ 松田 孝一、モンゴル帝国時代の漠地の探馬赤とその草地について、13、14 世紀東アジア史料通信、査読無、19、2012、39-47
- ⑥ 井上 治、焚香儀礼文に見るモンゴル人の山岳崇拜、南道文化研究、査読無、23、2012、185-229
- ⑦ Иноуэ Осаму, Польский урлаг, шинжлэх ухааны академи болон Польский шинжлэх ухааны академийн архивын Краков хотын салбарт хадгалагдаж буй В. Котвичийн цуглуулга дахь Эрдэнэ зуу хийдийг харуулсан эртний газрын зургууд, *Орхон хөндийн өв*, 査読無、2012-1, 2012, 63-76
- ⑧ 井上 治、北東アジアの白樺樹皮文化—環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学

一、北東アジア研究、査読有、22、2012、81-106

- ⑨松田 孝一、モンゴル国発見の史格の墨書について、13、14 世紀東アジア史料通信、査読無、21、2013、1-8

〔学会発表〕(計 11 件)

- ① Hitoshi Muraoka, Cities in the Mongolian Plateau that Appeared, The tenth International Congress of Mongolists, 2011 年 8 月 10 日, National University of Mongolia, Room #320,B-1, Mongol
- ② Matsukawa Takashi, Historical Aspects of Mongolian Buddhism: the Monastery Erdene Zuu, The tenth International Congress of Mongolists, 2011 年 8 月 10 日, National University of Mongolia, Room #305,B-5, Mongol
- ③ 松川 節、「モンゴル国で新たに発現した契丹大字碑文について」「新発見の契丹文字資料」(公開研究会)、2011 年 10 月 1 日、東京外国語大学 AA 研大会議室 (303)
- ④ Koichi Matsuda, Tibet and Tibetan Buddhism under Mongol Rule, Roundtable series on the nature of Asian relations from the 12th to the early 20th century; Roundtable4: The nature of historical political and spiritual relations among Asian polities and leaders within and in relation to the Tibetan Buddhist world, (招待講演)、2012 年 5 月 10 日、アメリカ合衆国, Asia Institute, UCLA, Los Angeles
- ⑤ Мацуда Коичи, Монголын Эзэнт гүрний үеийн Kitad нутаг дахь tan-ma-chi-гийн тухай, International Scientific Conference on the theme “Chinggis Khaan and Globalization” (招待講演)、2012 年 11 月 14 日、モンゴル国, Blue Sky, Ulanbator
- ⑥ 井上 治、焚香儀礼文に見るモンゴル人の山岳崇拜、世界遺産と東アジア山岳文化国際学術フォーラム (招待講演)、2012 年 5 月 18 日、韓国順天大学校 (順天市)
- ⑦ Inoue Osamu, Materials Related to Mongolian Maps and Map Studies Kept at Prof. W. Kotwicz's Private Archive in Cracow, The 3rd International Conference of Oriental Studies: Exploring Languages and Cultures of Asia. Professor Władysław Kotwicz in Memoriam, 2012 年 11 月 16 日、ポーランド、Polish Academy of Arts and Sciences, Cracow, Poland.
- ⑧ 松田 孝一、ハルホリン、エルデニゾーの断片碑文について、石刻の会、2014 年 3 月 28 日、龍谷大学、京都市
- ⑨ Koichi Matsuda, Ruling System of Tibet during the Mongol Empire Era, 13th

Seminar of the International Association for the Tibetan Studies, 2013 年 7 月 21 日 ~ 2013 年 7 月 27 日, National University of Mongolia, Ulanbator, Mongolia

- ⑩ 村岡 倫、モンゴル最古のチベット仏教寺院エルデニ・ゾーと旧都カラコルム―「仏教都市」エルデニ・ゾーの淵源―、龍谷大学アジア仏教文化研究センター 2013 年度第 5 回研究集会、2013 年 11 月 9 日、龍谷大学、京都市
- ⑪ 井上 治、モンゴルから見た北東アジア接壤地域、北東アジアの地域交流―古代から現代、そして未来へ、2013 年 11 月 15 日、島根県立大学、浜田市

〔図書〕(計 5 件)

- ① 吉田順一監修、早稲田大学モンゴル研究所 (編)、明石書店、『モンゴル史研究―現状と展望』、2011、404p、(井上 治共著部分「モンゴルにおける史書の受容と継承について」237-255)
- ② 松田孝一・オチル(共編)、大阪国際大学 (松田研究室)、モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究、2013、287p。(村岡 倫共著部分「4. 和林兵馬司劉公去思碑」91-121、松川 節共著部分「11. 勅賜興元閣碑」161-174)
- ③ 姫田光義、有斐閣、北・東北アジア地域交流史、2012、282p。(井上 治共著部分「第 5 章 匈奴とモンゴルの交流圏」143-166)
- ④ Tulusow, J., Polish Academy of Arts and Sciences, In The Heart of Mongolia : 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912, 2012, 413p。(井上 治共著部分 207-244)
- ⑤ 白石典之 (松田孝一、村岡倫共著)、『チンギス=カンとその時代』、勉誠出版、2014 (未刊)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 孝一 (MATSUDA Koichi)
大阪国際大学・名誉教授
研究者番号 : 7 0 1 4 2 3 0 4

(2) 研究分担者

村岡 倫 (MURAOKA Hitoshi)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号 : 3 0 2 8 8 6 3 3

松川 節 (MATSUKAWA Takashi)
大谷大学・文学部・教授
研究者番号 : 6 0 3 2 1 0 6 4

井上 治 (INOUE Osamu)
島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号 : 7 0 2 8 7 9 4 4